

原 著

ホームレスになること、その後「住まい」を得ることの経験的意味：
長期ホームレス経験者を対象とした質的研究クロヤナギ ナ オ ハシモト ヒデキ
畔柳 奈緒* 橋本 英樹*

目的 ホームレス状態にあることは“社会的排除の究極の形態”とされ、人の健康に多大な影響を与える。日本では、地域で安定した住まいを得て自立することを目指した支援が展開され、ホームレス概数は大幅に減少した。他方、高齢化・長期化が進み、支援回避や、支援利用後の再路上化が課題となっている。先行研究では、施設入居、退去形式、制度接続などの形式的成果や構造的要因に焦点が当てられ、住まいへの移行の経験は十分に検討されていない。当事者にとっての経験の意味を捉えることは、構造的要因の分析では捉えきれないニーズを明らかにし、支援の検討に資する。本研究は、長期的にホームレス状態にあり、その後住まいを得た人を対象に、住まいを得ることおよびホームレス状態で生きたことが、社会における周囲との関係性においていかに経験されていたか質的に記述することを目的とする。

方法 探索的質的研究を行った。調査地は東京都区部とし、協力団体を通じて対象者をリクルートした。ホームレス生活10年以上、アパート入居後1年以上の条件を満たす男性4人が参加した。2023年7～8月に半構造化インタビューを実施した。語りの背景や文脈を重視した現象学的アプローチに基づき、逐語録を反復的・解釈的に分析した。

結果 参加者の長期ホームレス経験および住まいを得る経験は三つの主題に整理された。＜何者でもなくなる＞とは、家族や職場、地域における役割や期待から離脱し、“どこかの誰か”としての自己を手放す経験であった。＜何者でもない自分、として受け入れられ生きる＞とは、ホームレス状態で生きる中、特定の場や関係性において社会的肩書や立場を問われず、自分のまま生きる実践であった。＜何者かになることが改めて求められる＞とは、住まいを得ることで、関係、期待、役割が生活に再び入り込み、成立していた生き方が揺さぶられる経験であった。

結論 ホームレス状態にあることやアパート入居は、住まいの有無に留まらず、周囲との関係性やその変容を伴う経験であった。支援においては、住まいの獲得に伴った関係性の変容が困難をもたらし得ることに留意し、個々の経験の違いを踏まえ、本人による変容の受け入れ、周囲との新たな関係性の構築に寄り添う関わりが求められる。本研究は、ホームレス支援において、物理的な住居提供にとどまらない支援の方向性を示唆するものである。

Key words : 長期ホームレス経験, アパート入居, 社会的排除, 経験の意味, 質的研究

日本公衆衛生雑誌 2026; 73(9): 772–781. doi:10.11236/jph.25–129

I 緒 言

ホームレス状態は「社会的排除の究極の形態」とされる¹⁾。貧困が所得の欠如に焦点を当てるのに対し、「社会的排除」は、政治・文化・人間関係など多方面において人が社会資源から遠ざけられるプロセスを指す²⁾。実際、ホームレス状態にある人はサービスへのアクセスが困難で基本的なニーズが未充足であり³⁾、心疾患等の有病率や死亡率は一般人

* 東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻
保健社会行動学分野
責任著者連絡先: 〒113-0033 東京都文京区本郷
7-3-1
東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻
保健社会行動学分野 畔柳奈緒
E-mail: naok@m.u-tokyo.ac.jp

口より高く⁴⁻⁷⁾、結核⁸⁾や精神疾患^{9,10)}、希死念慮や自殺企図の頻度が高いことが報告されている¹¹⁾。

日本におけるホームレス問題は1990年代に社会問題として顕在化し¹²⁾、「ホームレスの自立の支援等に関する特別措置法」(2002年)や「生活困窮者自立支援法」(2013年)の施行により、実態調査、一時保護、就労支援、住居提供等の施策が展開されてきた。2025年1月の全国のホームレス概数は2,591人であり¹³⁾、最多であった2003年の10分の1以下に減少した¹⁴⁾。他方、最新の調査では、回答者の半数以上が65歳以上、路上歴10年以上が約半数、20年以上が4人に1人であり¹⁵⁾、高齢化と長期化が顕著である。「支援施設を知っていても利用しない」人の割合は高齢・長期化するほど増加し、55歳以上かつ路上歴3年以上では9割超が「利用しない」と回答している¹⁵⁾。また、支援施策や生活保護の利用歴がある人が一定数存在し、制度接続後に再び路上生活へ戻る実態も、かねてより課題とされる¹⁶⁾。背景として、施設運営側の目的(就労自立)と本人の利用目的(休養等)の乖離¹⁷⁾、地域でのサポート不足¹⁸⁾など、制度利用と生活の定着を困難にする構造的要因が指摘されてきた。

日本のホームレス支援では、地域で安定した住まいを得て自立することが目標と位置づけられ^{19,20)}、施設入居や住居確保、制度接続といった形式的成果を中心に実施、評価されてきた²¹⁾。研究も、こうした成果指標や上述のような構造的要因の分析に重点が置かれ^{22,23)}、住まいへの移行が当事者にとっていかに経験されているかは十分に検討されていない。近年、住まい先行型支援が導入されつつあり²⁰⁾、地域定着の効果が一部で報告され²⁴⁾、住まいが新たな「生きる基盤」となる可能性が示されている²⁵⁾。しかし、ホームレス経験が一様ではないこと²⁶⁾、さらに制度利用後の再路上化という課題を踏まえば、住まいを得るために支援をすることでホームレス状態にある当事者への支援がその目的を到達できているとは言い難い。当事者がホームレス状態や住まいへの移行をいかに経験し、どのような意味を持ちうるのかを明らかにすることで、なぜ支援を回避し、なぜ定着に至らないのかという主要な課題に対し、構造的要因のみでは説明しきれない実態を明らかにできる可能性がある。

そこで本研究は、長期的にホームレス状態にあり、その後制度を利用して住まいを得た高齢者を対象とし、住まいを得ること、および、そこに至るまでのホームレス状態で生きたことを、社会における周囲との関係性においていかに経験されていたのかを質的に記述することを目的とする。当事者によっ

て住まいへの移行がいかに生きられたか、その意味を捉え直すことで、構造的要因の分析では明らかにされていない実態を見出し、ニーズに沿った、より実効性のある支援の構築に寄与し得ると考える。

Ⅱ 研究方法

1. 研究デザイン

当事者の語りを通じて経験の意味を捉え記述するため、探索的質的研究法を採択した²⁷⁾。

2. 研究対象

1) 調査地

東京都区部とした。全国で大阪府に次いでホームレス概数が多く、2025年調査では565人で全国の2割超を占めた¹³⁾。

2) 対象者

本研究の対象者は、ホームレス状態で10年以上生活し、アパート入居後1年以上を経過した人とした。厚生労働省による路上生活期間の区分の最長が「10年以上」であることを参照し、協力団体(東京都区部のホームレス支援NPO)との調整によりリクルートした結果、参加者はいずれも15年以上のホームレス経験を有していた。また、生活上の変動が大きい移行直後ではなく一定期間が経過している段階を対象とすることとし、アパート入居後1年以上を参加基準とした。その他、書面で同意が得られ、インタビューに応じられる心身の状態にある者を対象とし、ホームレスに至る経路や年齢、既往歴、居住形態などの背景要因は、多様性が大きいことから特に限定しなかった。協力団体を通じて4人に参加を依頼し、全員から同意を得た。

協力団体は、1990年代に始まった支援活動を前身として2000年代前半に法人化された。現在は、炊き出し、夜回り、福祉相談、居住支援等を行っている。居住支援はハウジングファースト型²⁰⁾を採用している。ステップアップ型と異なり支援当初に協力団体が用意する個室アパートに入居し、生活保護の受給等を経て本人名義でアパートを契約し転居する。調査時点で協力団体と参加者の居住支援関係は終了していた。

3. データ収集

インタビューは半構造化形式で実施し、質問項目は「ホームレスになる前の生活/きっかけ」、「ホームレス状態での生活」、「居住支援利用の経験」、「アパートでの生活」、「これからのこと」とし、参加者の語りに応じて順不同に展開した。実施時期は2023年7~8月、すべて筆頭著者が行った。一人1回ずつ60~75分であり、参加者の許可を得て録音した。場所は協力団体の事務所(3人)と参加者宅

(1人)であった。2人は筆者とのみ対面、2人は室内に協力団体関係者がいたが発言は最小限で語りを妨げなかった。

4. 分析方法

インタビュー音源を逐語的に文字起こしし、現象学的アプローチに基づいて分析した²⁸⁾。本アプローチは当事者の生きられた経験 (lived experience) に分け入りその本質や構造を捉えることを目指し、データをコード化せず、背景や生きられた文脈ごと理解、解釈する。本研究でも、一人ずつのデータを繰り返し精読し、ホームレス状態に至るまで、送った生活、アパート入居、入居後の生活を個別に辿り、何がいかに関験されていたのかを理解した。次に、特徴的な語彙、語り方、積極的に語られる出来事、繰り返し表出されるテーマ、語られない事柄、語りの流れのひずみや跳躍、語り方の変化等に注目し、語り手にとっていかなる経験だったのか解釈した。徐々に抽象度を高め、複数データに共通して現れる主題を経験の本質として抽出した。分析中は協力団体関係者に解釈の妥当性を確認し、著者間で合意に至るまで議論した。意見が一致しない場合はデータに戻って再度精読し、必要に応じて解釈を修正した。以上の複合反復的手続きを通じて偏った解釈を避け、妥当性と信頼性を確保した。

5. 倫理的配慮

本研究は東京大学大学院医学系研究科医学部倫理委員会の審査を受け、承認を得た (審査番号 2023076NI 承認日2023年7月19日)。参加者にはインタビュー前に、研究の目的・方法、守秘義務、任意参加、中途辞退の自由について文書で説明し、署名による同意を得た。音声データ、逐語録、同意書は匿名化し倫理委員会の規定に従い管理した。

Ⅲ 研究結果

1. 研究参加者の概要

参加者は4人 (A~D氏)、全員が地方出身の男性だった。インタビュー時の年代は60代1人、70代2人、80代1人で、ホームレス状態での生活は15年以上 (最長36年) だった。過去に制度的支援を受けた者はなかった。居住状態は公園に建てた小屋での定住2人、特定の公園と飯場、旅を往還する半定住1人、サウナと野宿を行き来する1人だった。3人は飯場、日雇い、都市雑業等で収入を得ていた。アパートへの入居理由は健康問題2人、居場所からの退去2人であった。インタビュー時は全員が生活保護を受給し、本人契約のアパートに住んでいた。

以下、抽出した主題を<>、参加者の語りを「斜体」、語り手を (A/B/C/D)、筆者補足を〔 〕で

示す。現象学的アプローチの特性に基づき本質的な経験を最も明瞭に示す事例を中心に提示する²⁸⁾。

2. 長期ホームレス経験者のホームレス経験と住まいを得る経験

1) <何者でもなくなる>

長期的にホームレス状態で生きた人たちの語りを紐解くと、ホームレス状態の起点に近い時期に、それまでの“どこかの誰か”として生きていた自分を手放す<何者でもなくなる>という経験があった。それは、個々に経緯は異なるが、家族・職場・地域といった社会的関係から、そこでの役割や期待を背負いきれずに離脱する出来事であった。路上で起居することはすなわち、単に物理的に住む家を失うだけではなく、“どこかの誰か”を規定していた強固な関わりの中にはもはやどうにも居られなくなり、そこから自らを引きはがす、痛みを伴う経験であった。以下に、その具体的な様相を示す。

~D氏の場合

「30まで、他のところで働いてて、〔借金で〕どうしようもなく、家に帰ってきた。〔中略〕それで1年ぐらいいぶらぶらしちゃって〔中略〕途中で、そこでやんなっちゃって、〔中略〕蒸発みたいな感じで〔家を出た〕」

「でも、あれがいますからね、兄嫁とか、そういうのがいるから、もう勘当されてるような感じですよ。〔中略〕でね、それも年月が経ったから、結局死亡みたくなっちゃったんじゃないすかね。1回除籍されたみたくなっちゃってましたよね」

7人兄弟の末子として北関東で生まれ育ったD氏は高校卒業後、就職のため家を出た。20代は転職を繰り返し働いていたが、10年が経った頃、賭け事で作った借金が返済できなくなり、親に肩代わりしてもらった。実家に戻り返していくことになったが、ある時「やんなっちゃって」すべてを放り出し「蒸発」、東京に流れ出た。以来、30余年のホームレス状態の間、家には「1回電話した」だけで関係は完全に途絶した。アパート暮らしの今も家族に再び連絡する意思はない。

大家族の中から自分の存在をかき消すことになった「蒸発」という行動は、「やんなっちゃって〔中略〕きちゃった」と語られるように、自らの衝動によるものだった。しかし、D氏にとっては、その同じ出来事が「勘当され」た経験としても刻まれていた。置かれた状況に居たたまれず衝動的に逃走はしたが、その実それは、生きていながらも家族の中から自分の存在がはじき出されることとして経験され

ていた。家族関係の中にあった自身の存在はかき消され、D氏は＜何者でもなくなる＞状態となった。

～B氏の場合

「帰りたくない、じゃなくて帰れなくなっちゃった。給料もらったばかりでお金はあるし、遊んでいるうちに、3日たち、1週間たち、これもう、帰るとばつが悪いなみたいな。〔中略〕体一つで、うん、もう帰れなくなっちゃったな、みたい」

「だから逃げてるっていうのは、世間の常識から、田舎からですね。そうです。全く！あの、結婚する気もなかったし、立場からいくと長男だったんです。長男！田舎の感覚で言うと、うちを継がなきゃいけない立場。そっから逃げたかったら、逃げちゃった」

B氏は40代前半、ふいに都内にやってきた。無為に過ごすうちに時が経った。帰って「ばつ」の悪い思いをするより、「うちを継がなきゃいけない立場」に応じられていない居たたまれない自分に戻るより、「ダンボール敷いて寝転が」ることが選ばれていた。それは「帰りたくない、じゃなくて帰れなくなっちゃった」末の選択であった。B氏にとって路上に出ることは、「世間の常識」や「長男」という立場や責任から自身を引きはがし、それらから距離をとることで成り立つ生の在り方であった。こうしてB氏は、仕事や住まいと、そして“どこかの誰か”としての規定から離れ＜何者でもなくなる＞状態となった。

2) ＜何者でもない自分、として受け入れられ生きる＞

ホームレス状態となり、当初は「どういうところに自分が合うかもわからないから」(C)「あっちこっち行って」(B)いたが、やがて、以下にみるように、“ここ”なら生きていける、生きていきたいと感じる転機を迎えていた。それは、ホームレス状態となり、家族や地域、職場といった社会的関係における役割・期待から距離を置いた＜何者でもなくなる＞経験の中、“どこかの誰か”ではない自分のままでいられる場や関係との出会いであった。そこでは、社会的な肩書や立場は問題とされず、意に沿わない期待に応じることは求められなかった。それは、＜何者でもない自分、として受け入れられ生きる＞という生活の実践として生きられていた。以下にその具体的な様相を示す。

～B氏の場合

「あっちこっち行ってみて、最終的にあそこ、K〔商業施設〕の横のあそこにとどり着いた。あ、ここ、いいや。あの当時は、鬱蒼としてたんですよ。〔中略〕〔そこが良かったのは〕荷物を隠しておけるから。藪の中に押し込んでおけばまず見えない。それくらいの藪だったんです」

路上に出て「あっちこっち行って」いた当初、ある公園の「鬱蒼」とした「藪」に辿り着いたB氏は「あ、ここ、いいや」と評価した。「荷物を隠しておける」という理由からは、持ち物を置いて出かけ戻るB氏の生活の在り様が伺える。実際その後、その公園に「がっちり手作りの小屋」を建て、「かなり年数」をかけ「生活できる」環境を作り上げ数十年間暮らした。藪に覆われたその場所こそ、B氏の新たな生活を受け入れ守る場となった。

この帰趨を踏まえると、「藪」が隠し守ったのは「荷物」だけではなかった。すなわち「藪」は、＜何者でもなくなった＞者が持てる荷物を大事に生きようとする、その新たな生き方そのものをも守っていた。この藪との出会いは、関係性や役割を離れ＜何者でもなくなる＞状態にあったB氏が、そのままに生きていくための足場を得た出来事だった。それまでの肩書や立場は問われず＜何者でもない自分、として受け入れられ生きる＞実践を支える場となった。

～C氏の場合

「〔初めて飯場に行った時〕やっぱりそういうところに働いてる人も、ホームレスが多いわけですよ。そうすると、どこにいたんだ、とかっていう話をしてくれる人も、いるわけですよ。〔中略〕俺んどこ来ればいいじゃない、と」

「この人だったら何とかしてあげたいとか、何とかしようとか、一緒にいたいなって人もいるわけだから。そういう人を探して、そういうグループと一緒に生活してきた。〔中略〕誰でもいいってわけじゃないんですよね。一緒にいる人間だから」

40代前半、父母と弟を相次いで喪ったC氏は茫然自失となり仕事も失った。そして「すべてない」「ぼーっと」した状態で都心の駅にいた。ほどなく始めた飯場仕事で、同じくホームレス状態の同僚に「俺んどこ来ればいいじゃない」と声をかけられた。そうして駅や公園を亘り歩く中で「この人だったら〔中略〕一緒にいたい」と思える人たちに巡り会っていた。

以来 C 氏は、飯場で稼ぎ、旅に出て、仲間のいる公園に帰る生活を続けた。C 氏が「探して」「話をして」「誰でもいいってわけじゃない」と選んだ仲間は、すべてを失いく何者でもなくなる＞自分を、そのまま受け入れてくれる相手であり、ともにいられる関係だった。仲間とともに生きるその生活は、＜何者でもない自分、として受け入れられ生きる＞実践であり、アパートに入った後も C 氏は仲間のいる公園を訪れている。

「〔旅先で〕少しこう、お話して、ある程度、こう、意思の疎通できると、今日泊まっていきなとか、ご飯食べな、とか」

「〔教会で〕ようこそいらっしゃいました、と。絶対嫌な顔しないんですよ、どこ行っても」

旅先で「泊まっていきな」と言ってくれる見知らぬ人や、教会で「嫌な顔」ひとつせず受け入れてくれる人との関わりは、また別の社会的な肩書や立場を問われない受け入れられる在り方として C 氏の中で経験されていた。ホームレス故に「馬鹿にされ」「ずっと、隣、周りの席が空く」経験を重ねてきた中で、その関わりではホームレスであることすら問われず、何者でもない自分がそのままに受け入れられた経験として語られた。

3) ＜何者かになることが改めて求められる＞

生活保護を受けアパートに入居すると、制度や地域社会、家族との関わり、期待、ルールが、改めて生活に入り込み、避けがたく作用した。ホームレス状態にあった時のように自分の判断や感覚だけに基づいて生活を形作ることが難しくなり、＜何者でもなくなる＞ままいることも、＜何者でもない自分、として受け入れられ生きる＞こともままならなくなった。住まいを得ることは、連綿と組み立ててきた生活が前提から揺さぶられ、それまで避けてきた“何者か”へと否応なく引き戻され、社会との関わり方の変容を要する経験であった。そこで求められる“何者か”は、個々の在り方や周囲との関係性に応じて異なっていた。以下に個別の様相を示す。

～A 氏の場合

「〔役所から〕何かきました。私、何でもわかればいいですよ。〔中略〕こんなボンクラはね、見たってわかんないですよ。〔中略〕だからそういうのが嫌なの、俺は！」

「〔アパートに〕いたいですかっていうのは、それ

は私には言えません。というのは、住ましてくれてるのが役所、役所でしょ。役所が出て、出ろついたら、出なきゃいけないんじゃないの？そんなことないの？」

「クーラーって何時間もつけっぱなしでいいのか？〔中略〕だから、いいっちゃうの、俺は知らないわね」

「だから今だって〔アパートに〕いるのがいや俺、出たいんだ」

住まいを得た A 氏の生活には、役所の書類、家電の扱い、いつまでそこに住めるのかといった、自分には「分からない」事柄が次々と入り込んでいた。入居前の20年以上、ホームレス状態にある時の A 氏は、必要な情報を集め、行動を決め、他者の要求や期待、制度から距離をとっていた。自分の力だけで生きることが A 氏にとっての＜何者でもない自分、として受け入れられ生きる＞実践であった。

入居後、その自己完結的な在り方は立ちいかなかった。他者のルールが生活の中に流れ込み、たとえ理解しきれなかったとしても、そのルールに従って生きる者として改めて位置づけられることは、A 氏が長く避けてきた在り方だった。「嫌なの」「出たい」と繰り返される語りは、住まいそのもののへの不満ではない。自分には理解しきれない世界に再び組み込まれ、そこでの期待に応じよという要請に対する苦痛の現れであった。

～B 氏の場合

「〔アパートに入って〕落ち着きませんでした。〔中略〕周り、世間、世間に対する気遣いですかね。トイレ流しても、おっそろしい音がするように。〔中略〕あと…あの…、ベランダのサッシを開けたら、通行人の人、人から中が見えちゃうとか。ホームレスだと、そんなの気にしないですから」

アパート生活の中で B 氏はささいなことが気になった。壁の向こうを気にして自らの生活音にも身構えた。他人の視線が部屋の中にいる自分にまで届くように感じられた。ホームレス状態ではなかった感覚だった。自分の感覚だけで生活を組み立てていた＜何者でもなくなる＞状態は、もはや成立しなくなった。それは、住まいを得ることで自分の存在が“誰かの隣人”“〇号室の人”として特定の場所に厳密に結び付けられ、社会との関わりを改めて意識し、背負わされることとして経験されていた。アパート入居に伴って B 氏は、自らの意志とは関係なく、地域の住人という“何者か”になった。

「〔困っていること〕終活です。〔中略〕死んだらどうなるんだろう。〔中略〕いや普通、一般の人は、いいでしょうけど、自分は、田舎に兄弟、その家族がいるわけですよ。絶対連絡が行くはずですから。うん。ね、戸籍が一生のもんだから、絶対行くわけですから。それはどうかな～。〔中略〕骨取りに来てくれて言われても、向こうは困っちゃうな、と。なんだ、兄貴の馬鹿たれがみたいな。絶対そう思います」

「理想は…、理想はホームレスとして、身分がわからないまま、無縁仏で葬られるっていうのが理想、でした。〔アパートに入った〕今でもそうです。どこの誰だかわからないまま、ね」

アパートに入居したB氏は「死んだらどうなるんだろう」と気を揉んでいた。制度につながることで、家族との関係がB氏の中で再び立ちあがってしまったためである。家族が「向こう」として現れ、「兄貴の馬鹿たれ」という悪態が想像できるほどに、捨て去ったはずの立場や関係がB氏に再び迫ってきていた。ホームレスであれば望めた「無縁仏」として逝く「理想」は断たれ、「長男」という役割をB氏は再び背負いこんでいた。B氏にとって住まいを得ることは、家族という次元においてもまた、望まない在り方に迫いられる経験であった。

～D氏の場合

「〔今後、どのように生活していきたいか〕わかんないんですよね…、なんかね…。自分の年も…、なんか年取ってるにも、止まっちゃってる感じでね。昔の…、68歳っていうのが、信じられない感じになる。自分の…、よくわかんなくなっちゃって。30年、何年間、なんかも、なんかすっぽりないような感じですよね。何やってたんだろう…。これから何やってるか、わからん」

「日雇いで暮らしてる時、そう、何もな、ないっていうか…。全然、何にも。そんな、からっぽのあれだったみたいでね…」

アパートで暮らすようになったD氏は、過去も未来も、今の自分も「よくわかんなくなっちゃって」いた。35年以上、毎朝日雇い仕事を探し、日銭を稼ぎ、知り合いがいない場所を探してはサウナなどに泊まっていた。周囲には「アパートがある」と「嘘」をついて生きたその長い年月は、「これといった思い出がない」「すっぽりない」「からっぽ」なものとして語られた。

制度につながり住まいを得ることで、嘘をつき、

必死で生きる日々は終わったが、それは放置してきた「からっぽ」に向き合わざるを得なくなる経験だった。「68歳っていうのが、信じられない感じになる。自分の…、よくわかんなくなっちゃって」と語られるように、過ごしてきた時間だけでなく、そこで必死に生きていたはずの自分自身すらも捉えることが難しくなってしまった。D氏にとって住まいを得ることは、曖昧なままにしてきた「からっぽ」の自分に否応なく向き合わされる経験であり、自分自身になることが改めて求められていた。

Ⅳ 考 察

「社会的排除」が、人が社会資源から遠ざけられる構造的なプロセスを説明するのに対し、本研究で抽出した＜何者でもなくなる＞＜何者かになることが改めて求められる＞という主題は、人がそのプロセスをいかに経験するかを表している。すなわち、ホームレス状態やアパート入居は、周囲との関係性における自身の“何者か”であることと結びつき、単に物理的な住まいの有無に留まらない経験たり得ることが示唆された。これらの経験は並列ではなく順序的に現れていた。まず役割や期待から離脱し＜何者でもなくなる＞経験があり、次に特定の場や関係性で＜何者でもない自分、として受け入れられ生きる＞実践が成立し、最後に住まいを得ることで＜何者かになることが改めて求められる＞経験があった。

＜何者でもない自分、として受け入れられ生きる＞実践は、B氏では藪という物理的な居所、C氏では仲間や旅先、教会での出会いといった社会的なつながりがその実践を支える“場”であった。両者の性質は異なるが、いずれもそれまでの社会的役割や関係性から離れた中で自分のまもられる在り方を支える関わりであったと理解できる。排除の中で見出されたこうした小さなつながりによって、彼らは“ここが自分の場所”“これでよい”と感ずることができていた。他者や状況とのつながりは限定的でも人の心情や関心に肯定的影響を与え得るとされ²⁹⁾、彼らの実践は＜何者でもなくなる＞ままに周囲とつながり、自分なりの居場所を得て生きることであったと言える。排除の中で根源的に自己受容的な在り方が成立しうるのは国外の研究でも示されている。たとえば、シドニーの不安定居住状態にある若者は、路上、公園、刑務所などでは“ホームレス”“依存症患者”といった決めつけから離れより自分らしくいられ³⁰⁾、制度的支援の場がかえって安心を妨げ、路上がむしろ自分でいられる場として経験されるという報告などがあり^{31,32)}、本研究の結

果とも符合する。なお、本研究の対象者の中にもこうした実践が確認できなかった者（D氏）がいることは留意を要する。そのD氏においては、自分自身と向き合う形で＜何者かになることが改めて求められる＞経験が起きたのに対し、その他の事例では他者との関係性の中で何者かになる要請が前面に示されていた。実践を支える場の違いや実践そのものの有無が、入居の経験の中にいかに差異をもたらし得るかについては、本研究のデータから結論付けることはできないものの、個々の生活史や関係性によって複雑であることが示唆され、今後の研究課題としたい。

長期ホームレス経験者がアパート入居することは＜何者かになることが改めて求められる＞経験であり、“隣人”“制度利用者”“田舎の長男”などの役割や関係性、また自分自身に直面し、“どこの誰でもない”自分から“何者か”へと、社会における在り方の変容を伴っていた。そうした変容を伴うアパート入居は、若く健康であれば「入っていない」、1年以上経過した「今でも出たい」、ホームレス状態がむしろ「理想」とも語られたように、必ずしも本人たちにとって容易ではなかった。上述のシドニーの調査では、当事者にとっての住まいとは、現在・過去・未来とつながり、思考・平穏・秩序・安全をもたらす心理的・存在的な感覚そのものであり、物理的な住居と必ずしも重ならないことが示されている³⁰⁾。また、住まいは自己を回復し「存在論的安心（Ontological security）」をもたらすとされ³³⁾、ハウジングファースト型支援でアパート入居を早期に行う理論的根拠の一つとなっている³⁴⁾。しかし、本研究やシドニーの調査からは、物理的な住まいが直ちに生きやすさや在り方の安定をもたらすとは限らないことが示唆された。住まいを得ることが支援の重要な側面であることは疑いようがない。しかし、関係性や在り方の変容に伴う困難が起り得ることを踏まえ、それまでに築かれた関係性や本人の在り方、求められている変容にも着目することが求められる。入居を終着点とせず、本人が変容に対応し新たな関係性を築く過程に寄り添う、時間をかけた伴走支援が望まれる。

本研究にはいくつかの限界がある。第一に参加者は全員男性であるが、性別によって路上での在り方が異なることが指摘されており³⁵⁾、今後は多様な背景を持つ参加者の協力が望まれる。第二にホームレス経験については記憶の再構成が語りに含まれる可能性がある。しかし、当事者の語りに現れる経験を探る現象学的アプローチでは分析結果に影響を及ぼすものではない²⁸⁾。第三に、本研究の対象は長期間

ホームレス状態を生きた人であり、早期に制度を利用した人や若年層等の経験には踏み込んでいない。年齢や路上生活期間の違いによって、住まいを得る経験の意味は異なる可能性がある。参加者数が限られていることも合わせ、本研究の知見はすべてのホームレス経験に一般化できるわけではない。最後にく何者でもない自分、として受け入れられ生きる＞実践は、一部で確認できず、成立条件や他事例への妥当性は今後の検討課題である。

以上の限界はあるが、本研究はホームレス状態の中にも独自の関係性や肯定的実践が成立し得ること、反対に住まいの獲得には在り方の変容と困難が伴い得ることを示し、ホームレス状態を「排除」、アパート入居を「包摂」とする一元的理解の再考を促し得る視点を提示した。本研究の特色は、ホームレス状態やその後のアパート入居を単なる住まいの有無ではなく、周囲との関係性や本人の在り方、その変容に関わる経験として記述した点であり、よって支援には物理的援助に加え、個々の在り方や周囲との関係性、その変容への丁寧な配慮が望まれることを示した。

V 結 語

本研究は、ホームレス状態にあった人が住まいを得る経験を質的に探索した。その結果、ホームレス状態になることは＜何者でもなくなる＞経験であり、長期ホームレス状態においては＜何者でもない自分、として受け入れられ生きる＞実践が成立し得ること、そして＜何者かになることが改めて求められる＞アパート入居には困難を伴い得ることが明らかになった。ホームレス状態とは単なる住まいの有無ではなく、社会における周囲との関係性に結びついた経験であることを示唆した。支援にあたっては、こうした変容を本人が模索し受け入れられるような時間と空間を支える視点を取り入れることが求められる。

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた参加者の皆様および関係団体の皆様に深く感謝申し上げます。また、分析の過程で多くの示唆をいただいた東京大学大学院公共健康医学専攻の皆様、東京大学大学院医学系研究科保健社会行動学の皆様に、心より御礼申し上げます。なお、本研究に関して開示すべき利益相反(COI)は存在しない。

（ 受付 2025.10.13 ）
（ 採用 2026. 2.10 ）
（ J-STAGE 早期公開 2026. 4.22 ）

文 献

- 1) Pleace N. Single homelessness as social exclusion: the unique and the extreme. *Soc Policy Adm* 1998; 32: 46–59.
- 2) Silver H. Social exclusion and social solidarity: three paradigms. *Int Labour Rev* 1994; 133: 531–578.
- 3) Omerov P, Craftman ÅG, Mattsson E, et al. Homeless persons' experiences of health- and social care: a systematic integrative review. *Health Soc Care Community* 2020; 28: 1–11.
- 4) Hwang SW. Homelessness and health. *Can Med Assoc J* 2001; 164: 229–233.
- 5) Morrison DS. Homelessness as an independent risk factor for mortality: results from a retrospective cohort study. *Int J Epidemiol* 2009; 38: 877–883.
- 6) Fazel S, Geddes JR, Kushel M. The health of homeless people in high-income countries: descriptive epidemiology, health consequences, and clinical and policy recommendations. *Lancet* 2014; 384: 1529–1540.
- 7) Aldridge RW, Story A, Hwang SW, et al. Morbidity and mortality in homeless individuals, prisoners, sex workers, and individuals with substance use disorders in high-income countries: a systematic review and meta-analysis. *Lancet* 2018; 391: 241–250.
- 8) 高鳥毛敏雄, 逢坂隆子, 山本 繁, 他. ホームレス者の結核の実態とその対策に関わる研究—結核検診の3年間の実践から—。結核 2007; 82: 19–25.
- 9) Barry RA, Nelson SE, Paquette K, et al. Prevalence of mental health disorders among individuals experiencing homelessness: a systematic review and meta-analysis. *JAMA Psychiatry* 2024; 81: 53–63.
- 10) 森川すいめい, 上原里程, 奥田浩二, 他. 東京都の一地区におけるホームレスの精神疾患有病率. 日本公衆衛生雑誌 2011; 58: 331–339.
- 11) Okamura T, Ito K, Morikawa S, et al. Suicidal behavior among homeless people in Japan. *Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol* 2014; 49: 573–582.
- 12) 岩田正美. ホームレス／現代社会／福祉国家：「生きていく場所」をめぐって. 東京：明石書店. 2000; 39–68.
- 13) 厚生労働省. ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）について（令和7年1月時点）. 2025. <https://www.mhlw.go.jp/content/12003000/001477787.pdf>（2025年10月2日アクセス可能）.
- 14) 厚生労働省. ホームレスの実態に関する全国調査報告書の概要. 2003. <https://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/03/h0326-5.html#mokuji>（2025年10月2日アクセス可能）.
- 15) 厚生労働省. ホームレスの実態に関する全国調査（生活実態調査）の結果（詳細版）. 2021. <https://www.mhlw.go.jp/content/12003000/000932240.pdf>（2025年10月2日アクセス可能）.
- 16) 厚生労働省. 平成24年「ホームレスの実態に関する全国調査検討会」報告書. 2012. <https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000002rdwu-att/2r9852000002re1x.pdf>（2025年10月2日アクセス可能）.
- 17) 後藤広史. 前路上生活者が施設から「自己退所」する要因. 社会福祉学 2007; 47: 31–42.
- 18) 山田壮志郎. 地域生活の持続性を高めるために. 山田壮志郎編. ホームレス経験者が地域で定着できる条件はなにか：パネル調査からみた生活困窮者支援の課題. 京都：ミネルヴァ書房. 2020; 219–228.
- 19) 山北輝裕. ハウジング・ファーストと新自由主義の共振をめぐる再検討. 理論と動態 2019; 12: 34–58.
- 20) 稲葉 剛, 小川芳範, 森川すいめい, 編. ハウジングファースト：住まいからはじまる支援の可能性. 東京：山吹書店. 2018; 1–221.
- 21) 後藤広史. ホームレス状態からの「脱却」に向けた支援：人間関係・自尊感情・『場』の保障. 東京：明石書店；2013. 55–126.
- 22) 後藤広史. ホームレス自立支援センター再利用者の実態と支援課題. 日本大学文理学部人文科学研究研究所研究紀要 2017; 93: 1–15.
- 23) 阿部 彩. 誰が路上に残ったか：自立支援センターからの再路上者とセンター回避者の分析. 季刊社会保障研究 2009; 45: 134–144.
- 24) 後藤広史, 稲葉 剛, 三村祐介, 他. ハウジングファーストの効果検証に関する研究：日本におけるホームレス支援の新たな可能性. 貧困研究 2019; 23: 105–116.
- 25) 杉野衣代. 東京におけるハウジングファーストによるホームレス経験者の生きる基盤—若年ホームレス経験者の事例を中心に—. 都市と社会 2019; 3: 104–127.
- 26) McCarthy L. Homelessness and identity: a critical review of the literature and theory. *People Place Policy* 2013; 7: 46–58.
- 27) Maxwell JA. *Qualitative Research Design: An Interactive Approach (Applied Social Research Methods)*. 3rd ed. Thousand Oaks: SAGE Publications. 2013; 1–159.
- 28) van Manen M. *Researching Lived Experience: Human Science for an Action Sensitive Pedagogy*. Albany: State University of New York Press. 1990; 1–173.
- 29) Walton GM, Cohen GL, Cwir D, et al. Mere belonging:

- the power of social connections. *J Pers Soc Psychol* 2012; 102: 513–532.
- 30) Robinson C. “I think home is more than a building”: young home (less) people on the cusp of home, self and something else. *Urban Policy Res* 2002; 20: 27–38.
- 31) Ravenhill M. *The Culture of Homelessness*. Aldershot: Ashgate. 2008; 145–180.
- 32) Kryda A, Compton MT. Mistrust of outreach workers and lack of confidence in available services among individuals who are chronically street homeless. *Community Ment Health J* 2009; 45: 144–150.
- 33) Dupuis A, Thorns DC. Home, home ownership and the search for ontological security. *Sociol Rev* 1998; 46: 24–47.
- 34) Padgett DK. There’s no place like (a) home: ontological security among persons with serious mental illness in the United States. *Soc Sci Med* 2007; 64: 1925–1936.
- 35) 丸山里美. 女性ホームレスとして生きる〔増補新装版〕. 東京：世界思想社. 2021; 1–288.
-

The lived meaning of becoming homeless and subsequently obtaining housing: A qualitative study of individuals with long-term experiences of homelessness

Nao KUROYANAGI* and Hideki HASHIMOTO*

Key words : long-term homelessness, moving into apartment, social exclusion, meaning of lived experience, qualitative research

Objective Homelessness has a profound impact on health and is often framed as an extreme form of social exclusion. In Japan, policies and support programs have promoted stable housing as a pathway to independence, contributing to a marked decline in the number of individuals experiencing homelessness. Nevertheless, the homeless population has aged, and homelessness has become prolonged; among this population, the avoidance of support services and return to street homelessness remain notable challenges. While previous studies have emphasized structural factors and formal outcomes, such as facility entry, reasons for discharge, and housing acquisition, the subjective experiences of individuals transitioning into housing remain underexplored. The objective of this study was to qualitatively describe how individuals experiencing long-term homelessness perceive homelessness and obtaining housing within the context of their relationships with others in society.

Methods This was an exploratory qualitative study. Participants were recruited through a support organization in the Tokyo metropolitan area. The study included four men who had experienced homelessness for more than 10 years and had been living in apartments for at least 1 year at the time of the interviews. Semi-structured interviews were conducted between July and August 2023. The interview transcripts were analyzed using a phenomenological approach, focusing on lived experiences, context, and meaning through an iterative interpretive process.

Results Three major themes were identified. “*Becoming ‘no one’*” described experiences of disengaging from social roles and expectations tied to family, work, and community, resulting in the loss of a socially defined sense of self. “*Living as oneself while being accepted*” referred to practices through which participants sustained their lives during homelessness by finding specific spaces or relationships in which they were not judged based on their social status or roles. “*Being required to become ‘someone’ again*” captured the experience of obtaining housing, in which institutional rules, social expectations, and relationships re-entered daily life, destabilizing previously viable ways of living.

Conclusions Experiencing homelessness and obtaining housing were not defined by the presence or absence of housing; rather, they involved relationships with others and shifts in those relationships. In providing support, it is necessary to recognize that relational changes accompanying housing acquisition may create new difficulties. Support should therefore be attentive to individual experiences, accompanying individuals in accepting such changes and building new relationships. This study suggests directions for homelessness support that extend beyond the provision of physical housing.

* Departments of Health and Social Behavior, Division of Health Sciences and Nursing, Graduate School of Medicine, The University of Tokyo